

高齢者とペットの共生 支援報告書

ペットと共に心も身体も健康に生きる社会に向けて

高齢者とペットの課題



愛犬が生きがいという
70代の飼い主

当団体では、2022年8月より「犬猫相談ホットライン」を開設し、生活困窮者をはじめとするペット飼育者からの相談受付と対応を行ってきました。2025年2月までに寄せられた相談は555

件にのぼり、延べ710回の訪問支援を実施しています。これまでの取り組みの詳細については、2022年度・2023年度の報告書をご覧ください。

高齢者がペットを飼育することの効用については、さまざまな機関による研究があり、要介護度の進行を遅らせることや介護費用の軽減、孤独感の緩和、社会的つながりの促進など、数多くの効果が報告されています。一方で、当団体には「高齢になり、ペットの飼育を続けることが難しくなった」との相談が多く寄せられています。

「保健所で殺処分されるのは可哀そう」「誰か飼ってくれる人や保護団体に引き取ってほしい」と願う飼い主は多いものの、金銭的に余裕のない方がほとんどです。引き取り後には飼育費や医療費などの負担が生じるため、安易に無償での引き取りに応じることは困難です。

また、親族が遠方に住んでいたり、身寄りがなく孤立した状況にある高齢者にとって、ペットの存在は生きがい

となっており、自分で飼うことが難しい場合には、野良猫にエサを与えることで心の支えとしている方もいます。中には、猫が家の中と外を自由に出入りできるようにしている方も見受けられます。

多くの方は、自身の病気、入院、施設入所といった事情に



室内と外自由に飼われている
未去勢の猫



飼い猫が2匹でもお世話ができなくなってしまうと
室内は不衛生になってしまう

直面して初めて、「このままではいけない」と気づかれるケースが多いです。一人暮らしでペットの世話が十分にできない、飼育頭数が適正でないなどの場合、生活環境が悪化し、本人が介護福祉サービスを受けることも難しくなってしまいます。ペットも糞尿まみれとなり、多頭飼育崩壊に陥るなど、動物の福祉も損なわれる結果となります。

また、野良猫に餌を与えるだけで繁殖制限や衛生管理を行わなければ、近隣トラブルに発展することもあります。

こうした背景から、行き場を失うペットが後を絶たず、その対応に保護団体だけでなく、福祉関係者までもが頭を悩ませる状況が続いています。ある社会福祉法人の方からは、「人並みに幸せだと思える人生を歩んできた人が、施設入所のために、最期まで大切にしていたペットを保健所に連れて行かざるを得なかった。そんな後悔を抱えたまま施設に入ること、果たして意味があるのか」との声も聞かれました。

ペットの存在が高齢者の生活の一部となっていることは明らかです。そのためにも、どのようにペットと暮らしていくかは慎重に考え、選択する必要があります。そして、最期に後悔しないためにも、予防的な対策と、万一に備えたフォロー体制を整えておくことが重要です。

その方法の一つとして、ペットを飼いたい高齢者と、行き場のない犬猫をマッチングする仕組みの構築が有効ではないかと考えています。



未避妊未去勢で子猫が5匹も
産まれていた



飼い主の施設入所により預かってもらうことになった猫



譲渡会の様子 高齢者の姿も多数見られる

ず〜っと預かり制度の試み

「ず〜っと預かり制度」は、当法人が引き取った法人所有の犬猫について、所有権を法人に残したまま、希望者に「預かる」という形で一緒に暮らしていただく制度です。予防医療として必要なワクチン接種やノミ・ダニ駆除薬の提供、LINE を通じたお世話の相談対応に加え、犬猫の体調不良時には法人が医療費を負担します。制度利用者には月会費をご負担いただきますが、希望者には見守りサービスを含めたフードの定期配送もオプションとしてご提供可能です。

この制度は、高齢で身寄りがない方や、「ペットを飼いたいけれど、自分に何かあった時に託す人がいない」といった事情を持つ方とのマッチングを想定しています。

以前から譲渡会に来場される高齢者の方々から、「飼いたいけど、もう年だから無理」といった声や、「どうしても子猫から飼いたい」という希望を多く伺っていました。そうした背景もあり、岐阜市地域猫の会にご協力いただき、毎月1回開催している保護猫の譲渡会にて「ず〜っと預かり制度」の案内を開始しました。

当初は制度に関心を持ってくださる方はいたものの、実際の利用には至らない状況が続きました。しかし、「ボランティアとしてなら預かってみたい」という方が現れ、当法人の預かりボランティアとしてご登録いただくことができました。

現在では、「ず〜っと預かり制度」の案内を継続しながら、ボランティアによる一時預かりの案内も行っており、60代の方3名、40代の方2名、30代の方1名、計6名の方に預かりボランティアとしてご協力いただいています。

こうしたボランティアの皆さまは、保護された猫を譲渡先が見つかるまでの間お世話してくださる、非常に心

強い存在です。

中でも、60代のTさんは印象的な方でした。以前飼っていた猫を亡くされ、家に残っていた用品を寄付として譲渡会に持ってきてくださったのがきっかけです。

一軒家でおひとり暮らしのTさんは、「本当はまた猫と暮らしたいけれど、飼うとなると簡単に家を空けられない。期間が決まっている一時預かりなら気が楽だし、また猫と過ごすことができる。それで役に立てるなら、ぜひ協力したい」とおっしゃり、ボランティアに登録してくださいました。

Tさんにはこれまでに2匹の猫を譲渡まで預かっていただき、現在は3匹目の猫をお世話いただいています。「年齢的に猫を飼うことをあきらめていましたが、また猫と関われること、そして預かった猫が少しずつ人に慣れていく姿を見るのがとても嬉しいです」との感想もいただいています。

Tさんが預かってくださっている猫が譲渡会に参加する際には、スタッフが猫を迎えに伺います。その際には世間話も交えながら、楽しく猫の様子をお聞きしています。Tさんの笑顔を見るたびに、猫の存在がTさんの生活に温かさをもたらしていることを実感します。

Tさんは猫の所有者ではありませんが、「ペットと暮らす」という新しい形を選び、その暮らしを実現されています。



イベントで預かりボランティアの募集を行った



飼い主が亡くなり、Tさんの家にいったばかりの頃 まだ警戒している様子がある



Tさんのお家でくつろぐことができるようになった



譲渡会でず〜っと預かり制度の案内を行った

【家族構成】本人：70代女性 / 夫：70代（既に施設に入所） / 猫2匹（共に10才以上の高齢猫）

事例概要

末期がん患者の高齢者が2匹の猫を飼っており、今後抗がん剤治療が必要となるため、副作用で猫の世話ができなくなる恐れがある、そのため一時的な預かりができないかという、地域包括支援センターからの相談であった。当法人は、本人の抗がん剤治療の日程を確認し、受け入れ準備を進めることにした。



支援の経過

初回の自宅訪問は、地域包括支援センターと共に行った。本人は階段から転落して腰を骨折していたが、何とか歩ける状態であった。2匹の猫の世話はこれまで本人が行っていたが、腰の痛みがひどくなってからは、十分に世話ができなくなっていた。猫のトイレや床には、糞が山のように堆積していた。本人

は元々動物が好きで、以前は猫を15匹以上飼い、犬も飼っていたと嬉しそうに話をしてくれた。今後入院することになれば、猫を譲渡したいとも言っている。しかし、話を進めるうちに、本人が猫との生活を続けたいという希望があることが分かり、ペットシッターとして支援を行うことになった。

ペットシッターとしての支援の始まり

2匹の猫は、本人がいる部屋とは別の部屋で過ごしていた。まず、猫たちが暮らしやすい衛生的な環境を整えるため、トイレからあふれた糞や床に積もった糞、尿で濡れた床の乾燥、散乱している空のフード袋の片付けを行った。猫達はスタッフを警戒し、姿を現さずベッドの下に隠れていた。シッター作業の様子や猫の様子は、地域包括支援センター、訪問ヘルパー、訪問看護など他の関係機関とも共有できるように記録を残した。シッター作業の様子を毎回嬉しそうに聞いている本人の姿がみられた。

夏になると、日中の室温が35度以上、湿度が70%に達

することもあり、人と猫の熱中症が心配される状態であった。窓を開けなければ使用できない冷風機が備え付けてあったため、猫の脱走防止のために窓の隙間を埋めて使用できるようにした。ペットシッターを続けるうちに、本人との会話も弾むようになり、猫のための遊び場を作ってあげたいと猫のための環境作りを一緒に考えた。



懸念点

本人は末期がんであり、今後他界した場合、猫の行先について考えておかなければならないが、一緒にいたいという本人の希望とは反対に、手放すことを提案する意見が多く、相談できる人がいないと話している。また、猫を引き取る際に

遺す費用面でも悩んでいた。そのうちに、本人の介護度が上がり、自宅でケース会議が行われ、共生センターも参加した。ケース会議の結果、関係者全員が猫ありきで支援をするということで合意することができた。

本人の体調が日に日に悪化…

本人はベッドの上で過ごす時間が増え、「2匹が今後幸せになってくれたらいい」と話していた。これまで日中は猫たちと別の部屋で過ごし、夜は一緒に寝ていたが、部屋を移動する元気もなくなり、夜も別々の部屋で過ごすようになった。本人が猫との触れ合いを望んだため、猫をベッドへ連れて行くと、抱きしめる場面があり、その表情はとても穏やかで、本人にとってはかけがえのない時間となったと感じた。

福祉事業所の協力により、猫たちを家の中で自由に歩き来させることが実現した。猫を自由にさせるためには、さまざま

な配慮が必要であり、猫が本人の食事や飲み物をこぼしたりしないよう配置についても入念に相談し、目の見えない本人と猫たちの安全な環境作りに努めた。また、猫が脱走しないように、すべての部屋に扉を閉めるように張り紙を貼り、多くの看護や介護スタッフが関わる中で、全員が意識できるようにした。最終的に、本人は最愛の猫たちと共に過ごしながら息を引き取った。



高齢者の病気を抱えた状態でのペット飼育の課題

年齢や病気、障害などの理由でペットの適切な飼育が難しくなると、周囲からは「お世話もできないのにペットを飼うべきではない」「自分のためにペットを手放すべきだ」といった意見が出ることがある。しかし、本人にとってペットは大切な家族であり、パートナーである。ペットを手放さざるを

得ない選択をすることは、非常に辛いこと。少しの手伝いをするだけで、一緒に過ごし続けられるのであれば、そういった支援も選択できるようになると良いと思う。また、本人が亡くなった後に残されたペットの行き先は、できるだけ早く考えておくべきだと思う。

今回のケースは、高齢、末期がん、失明とさまざまな要因が重なったペット飼育者のケースであった。本人が猫と一緒に過ごしたいという希望があったため、ペットシッターとして支援を行った。訪問中の短い時間だったが猫と一緒に過ごす時間を、本人は楽しみにしていたようである。主治医からはアニマルセラピーだねと言われ、福祉関係者は本人が猫に癒される姿を見て、生きる力となっているのを感じたのではないかと。私達もこの事例を通じて、ペットが人に与える精神的な癒し、温もり、安心感を強く実感した。ペットの存在が精神的不安を抱える本人に与えたプラスの影響は大きかったと言える。しかし残された猫達の存在を軽んじるわけにはいかず、新たな家庭に迎えられるまで、負担にもなっている。

事例概要

Bさん夫妻（仮名）は70代の夫婦で、年金とパート収入で生活している。自宅で15匹の猫を飼育していたが、ペット不可の賃貸物件での多頭飼育が発覚し、退去を求められた。結果的に、引越し先で全ての猫を連れて行くことができず、一部を放置するという問題が発生した。



経緯

地域の猫ボランティアが、ある親子猫の保護活動をしていた際、急激に野良猫が増えていることに気づき、調査を進めていた。その中で、車でエサを与えに来ていた夫婦に出会い、事情を聞いたところ、増えた野良猫は元々この夫婦が飼っていた猫であることが判明した。

夫婦はもともとペット飼育禁止の借家で暮らしていたが、妊娠した猫を保護したことをきっかけに飼育を開始。

しかし、不妊去勢手術の費用が工面できず、そのまま放置した結果、猫は増減を繰り返し、最終的に15匹にまで増えてしまった。

幸いにも、奥さんがきれい好きだったため、家の中は清潔に保たれていたが、大家に多頭飼育が発覚し、退去を命じられた。

退去後の問題

新しい住居を探したものの、15匹の猫を受け入れてくれる物件が見つからなかった。その結果、以下のような形で猫が分散することになった。

- 1匹：ペット不可の物件に持ち込み
- 2匹：車の中でケージ飼育
- 2匹：引越し先アパートの外に放す
- 10匹：引越し後、アパートの周辺に移動させる予定

夫婦に意向を確認したところ、「できる限り一緒に暮らしたい」との希望があったため、猫ボランティアが全頭捕獲し、不妊去勢手術を実施。その上で、一時保護シェルターにて、新しい住居が見つかるまでの約2か月間、ボランティアと夫婦が交代で世話をすることとなった。



解決策

15匹の猫を受け入れられる賃貸物件はほとんどなく、唯一、大家が直接管理している借家を見つけ、入居が決定した。引越し費用については、猫ボランティア団体が負担した。

新居では、猫用のケージを複数設置し、猫と人が生活スペースを分けて暮らせるように工夫。猫ボランティアがDIYで仕切りを作るなどのサポートを行い、猫用のケージなどは全国からの寄付で賄うことができた。

その後、譲渡会を実施し、3匹を新しい飼い主に譲渡、1匹は「終生預かり」として他の家庭に引き取られた。最終的に、夫婦のもとには11匹の猫が残ることとなった。



その後の経過と課題

新しい住居での生活が落ち着いた後、約1年が経過した頃、ご主人ががんを発症。入退院を繰り返した末、半年後に亡くなった。

今後、奥さん一人で11匹の猫の世話を続けるのは難しいと考えられ、現在、猫の新しい引取先を探すことが課題

となっている。加えて、奥さん自身の生活についても見守りが必要であり、地域包括支援センターと連携しながら状況を確認していくこととなった。今後、猫の飼育状況だけでなく、奥さんの健康状態や生活の維持ができるかどうかも含めて支援を検討していく必要がある。

後日談として

地域包括センターのケアマネが自宅に訪問した際に多頭飼育で、あんなにきれいな家を見て驚いたと言っていた。猫の飼育環境を適切に整える支援の必要性を再認識した。

多頭飼育崩壊は、外部からは気づかれにくく、特に社会福祉とのつながりが少ない家庭では問題が表面化しにくい。また、不妊去勢手術を実施しても、飼い猫が外に出されてしまうと、野良化してしまう現実がある。

高齢者が猫を多頭飼育する場合、自身の健康状態の変化に備え、事前に猫の行き先を決めておくことが重要である。今回のケースでは、ボランティアの介入により、問題が大きくなる前に対応できたが、今後も同様のケースが発生する可能性があるため、地域社会としての支援体制を強化する必要がある。